

6月21日「キリストの内に留まる」ヨハネ3：22～36

皆さんはイエス様の先生が誰かご存じでしょうか？今日の福音書に登場した洗礼者ヨハネです。イエス様はこのヨハネから清めのバプテスマを受けたからです。でもこれって、ちょっと微妙なんですよ。洗礼者ヨハネにはたくさん弟子たちが居ましたから、イエス様の活動が本格化していくと、ヨハネ側の人間からすると「あれ？あいつヨハネ先生の弟子のくせして、勝手に自分の弟子取り出したぞ！」となるわけです。しかも、イエス様の働きはどんどん広がって師匠であるヨハネをも超えるようになっていったのですから、ヨハネの弟子たちは心中穏やかではなかったでしょう。今日の福音書はそういう話です。ヨハネの弟子たちがヨハネに訴えるんですね！「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの方が（イエスのこと）、洗礼を授けています。みんながあの方の方へ行っています。」複雑な心境が分かるかと思います。

私が購入している“Ministry”というキリスト新聞社発行の雑誌があります。そこには私の1個下と2個下のゼミの後輩が連載を持っています。日本全国の教派を超えた牧師たちが読む雑誌にですよ！正直に申し上げますが「もう購読するのやめよかな」と思ったことがあります。「後輩に追い抜かれてしまった・・・」私も牧師ですが、ジェラシーが無くはないのです(笑)ヨハネの弟子達も同じような心境だったと思うのですが、さあ、ヨハネはどう対応したのでしょうか？まさに神対応だったんです！

ヨハネは詰め寄る弟子たちに言いました。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。わたしは、『自分はメシアではない』と言い、『自分はある方の前に遣わされた者だ』と言ったが、そのことについては、あなたたち自身が証ししてくれる。花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」

私もこういう心構えで雑誌を読めばよかったんだなあ、と思わされます。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。わたしは喜びで満たされている。」誰かの成功をこうやって心から喜べると良いです

よね。ヨハネは、イエス様が救い主として働いていかれるのを心から喜んだ、というのです。

さて、実は今日、もう一箇所日課で選ばれていた、同じくヨハネの手紙 I にはこんな言葉があります。

「2:22~25 偽り者とは、イエスがメシアであることを否定する者でなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです。御子を認めない者はだれも、御父に結ばれていません。初めから聞いていたことを、心にとどめなさい。初めから聞いていたことが、あなたがたの内にいつもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にいつもいるでしょう。これこそ、御子がわたしたちに約束された約束、永遠の命です。」

ヨハネの手紙は「反キリスト」という異なる教えから教会の人達を守るために書かれました。「反キリスト」が何を指すか確定するのは難しいのですが、まずイエス様を救い主と認めないことだとあります。そして、そこから信仰を守る為に、最初からの教えの通り、イエスこそ、救い主キリストであるということを「心にとどめる」。それが、父なる神さまの内にいつもいることであり、永遠の命を受けることだと教えるのです。今日の福音書にも、洗礼者ヨハネの言葉にこんなものがありました。「御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。御子を信じる人は永遠の命を得ている。」イエス様をまことの救い主だと信じるのが永遠の命への道なんです。

こう語ってしまうと、イエス様を救い主だと信じると公言して、洗礼を受けた者はみんなキリストの内に留まっていると言えるのでしょうか？私はそうとも言い切れない現実があると思っています。先日、アメリカの大統領の行動が大きな批判を浴びました。何をしたのか？アメリカで起きた黒人差別へのデモ行動に批判的な発言をした後に、近くの教会の門に行き、玄関のところで、聖書をもって写真を撮ったのです。まるで自分の発言がキリスト者として裏付けられているかのように。その後どうした

か・・・彼はその教会の礼拝に出席することもなく、牧師と話すこともなく、立ち去ったのです。なかなか酷いですね。彼はもちろん洗礼を受けているし、大統領でもあります。しかし彼がキリストの内にあるとは私にはどうしても感じ取れません。聖書の言葉に耳を傾けたり、御言葉を受け取ることはせず、単にキリスト者であることを利用したのです。分かりやすいから引用しましたが、私たちも自分自身を深く省みる必要があります。私は洗礼を受けたら「はい終わり」ではないと思っています。聖書の御言葉に聴き、神のみ旨を問い続けることがキリストの内に留まることではないでしょうか？だから私たちは毎週礼拝に集まり、御言葉と向かい合っているのです。「2:5~6 神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。これによって、わたしたちが神の内にいることが分かります。神の内にもいつもいるという人は、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません」

もう少し「キリストの内に留まる」について考えてみました。「キリストの内に留まる」それは、単に教会に通い、説教を聞き続けること（それだけでも十分大変ですが）だけではないと思っています。教会は聖書を通じた単なる仲良しクラブではありません。キリストの内に留まるとは、私たちの交わりが常に新しくされていくことなのです。

アメリカのデューク大学神学部に設立された、「和解センター」そこが発行している「和解の神学」のシリーズがあります。クリス・ライスという方が書かれた『すべてのものとの和解』にこんな一文があります。

わたしたちは「わたしたち」と「彼ら」が対立する世界の中で生きています。わたしたちの国家、わたしたちの民族、わたしたちの家族。これらの「わたしたち」が力をふるっています。わたしたちが好ましく思い、仲間に加えたいと思う人たちがおり、そしてまた、わたしたちが好ましく思わず、排除したいと思う人たちがいます。

キリスト者にとって、一番最初にくる「わたしたち」とはいったいだれのことでしょうか。主イエスはエルサレムでご自分の弟子たちに言われ

ます。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」(使徒1：8)使徒言行録はそれに続いて、ユダヤ人と異邦人、男と女、富める人と貧しい人が一緒になってさまざまな文化を持つ人々からなる多言語の新しいコミュニティを作り上げながら見知らぬ土地が聖なる土地になっていくことを語ります。神は教会に「新しいわたしたち」(New We)を与えてくださるのです。そして今、このわたしたちの時代にも、教会に「あたらしいわたしたち」を与えてようとしておられます。国家と国家、集団と集団、文化と文化、過去の痛みや不正義によって分裂した、人と人との分断を食い止めようと模索する「新しいわたしたち」を。(クリス・ライス『すべてのものとの和解』)

先週、私たちはインドネシアからの友人たちとお別れをしました。彼らに出会うまで私の祈りの「私たち」にインドネシアのことは入っていませんでした。けれども、彼らが、民族や言葉の壁を乗り越えて、植民地支配という葛藤やしがらみも乗り越えてきてくださった。そのおかげで、私の「わたしたち」にはインドネシアのことが入るようになりました。私は思います、こうやって「新しいわたしたち」になっていくことこそが、キリストの内に留まることだと。彼らとの出会いによって私たちはよりキリスト者にされていったのです。

私たちがキリストのうちに留まること、それは確かにイエスこそ救い主であると告白し、信じるころから始まります。けれどもそれは洗礼を通して一気になされることではありません。キリストに留まる。それは御言葉に聴きながら、言葉と行い、そして私たちの存在すべてが神の内にあるように祈り求めていくことです。キリストの内に留まる。それは私たちが出会い「新しいわたしたち」にされていくことです。神さまはそうやって、私たちを少しずつキリスト者の「深み」へと導いていかれるのです。これからも共にキリストの内に留まり続けていきましょう。